ステージラボ四日市セッション　募集要領

ステージラボは、地域の文化・芸術に携わる公立ホール・劇場等並びに地方公共団体の職員の方々を対象とした研修プログラムです。少人数のゼミ形式によるセミナー、グループ討論、ワークショップなど双方向の研修で、地域における創造的な表現活動の環境づくりに取り組む人材の育成と、相互交流の促進を目指して実施します。

■ 開催概要

日　　程：2027 年 2 月 2 日（火）～2 月 5 日（金）[4 日間]
※公立ホール・劇場マネージャーコースは、2 月 2 日（火）～2 月 4 日（木）[3 日間]
会　　場：四日市市文化会館（三重県四日市市安島 2 丁目 5-3）
開講コース：①ホール入門コース、②自主事業コース、③公立ホール・劇場マネージャーコース
定　　員：各コース 20 名程度
参 加 費：研修参加は無料　※交通、宿泊、滞在中の食事はご自身で手配、費用負担いただきます。
開催体制：主催／（一財）地域創造、（公財）四日市市文化まちづくり財団
共催／四日市市　後援／三重県

①ホール入門コース

コーディネーター：岩崎 正裕（劇作家・演出家／劇団太陽族代表）

演劇や音楽のワークショップ体験を通じて、鑑賞型に留まらない公共ホールの事業のあり方を考えます。まずは体験、自己の身体感覚の中で何が揺らぎ、何が呼び覚まされるのか。ディスカッションによる参加者同士の交流の中から、共通の悩みが浮かびあがるかもしれません。そのことを土台に、それぞれの地域の特色ある文化事業を展望しましょう。

[対象となる職員の目安]
公立文化施設（ホール・劇場等）で企画・運営に携わる職員（指定管理者である民間事業者の職員も含む）および地域の文化・芸術に携わる地方公共団体職員で、公立ホール・劇場（開館準備のための組織を含む）において業務経験年数 1 年半未満（開館準備のための組織は年数不問）の方。

②自主事業コース

コーディネーター：松本 志帆子（藁工ミュージアム 学芸スタッフ／NPO 蛸蔵 理事）

文化芸術を創造し、楽しむことは、居住地域や国籍、性別、年齢、障がいの有無、社会的立場等にかかわらず、誰もが持つ生まれながらの権利です。さまざまな法整備や社会の変化を背景に、劇場や音楽堂には、社会参加の機会をひらく社会包摂の拠点としての役割が求められています。本コースでは、その背景を学ぶとともに、種々の事例や当事者との対話を通じて、共生社会の実現に向けた取り組みを各地域で始めるための道筋を一緒に探りましょう。

[対象となる職員の目安]
公立文化施設（ホール・劇場等）で企画・運営に携わる職員（指定管理者である民間事業者の職員も含む）および地域の文化・芸術に携わる地方公共団体職員で、自主企画による事業を実施している公立ホール・劇場において業務経験年数が 2～3 年程度の方。

③公立ホール・劇場マネージャーコース

コーディネーター：松浦 茂之（公益財団法人三重県文化振興事業団参事、三重県文化会館副館長兼事業課長）

地方の人口減と超高齢社会が進む中、これからの劇場はどうあるべきか？劇場の利用率や主催事業の入場率など、かつての定量的な成果指標がもはや時代遅れとなった感があります。「場」としての劇場の魅力をどう高めていくかを考えながら、自治体の地域全体を「面」として捉え、最適な文化振興を図るにはどのような事業展開が考えられるのか、みんなで楽しく一緒に考えます。

[対象となる職員の目安]
公立文化施設（ホール・劇場等）で企画・運営に携わる職員（指定管理者である民間事業者の職員も含む）および地域の文化・芸術に携わる地方公共団体職員で、公立ホール・劇場において管理職程度の職責を持つ方。

■ 申込方法　**申込締切　2026 年 11 月 25 日（水）必着**

当財団ウェブサイト内「ステージラボ」ページ（https://www.jafra.or.jp/project/training/01.html ▶）から、**①参加申込書**、**②アンケート**、**③副申書（民間事業者の場合）** をダウンロードし、必要事項をご記入のうえ、専用フォームよりお申込みください。

フォーム送信後すぐに、受付確認メール（自動返信）をお送りいたします。メールが届かない場合は、お申込みが完了していない可能性がございますので、お手数ですが、お電話でお問い合わせください。

【参加者の決定】アンケート内容、応募状況などを考慮のうえ（**アンケート重視**）、参加コースと参加の可否の調整を行い、2026 年 12 月中をめどに、申込者あて文書によりご連絡いたします。

【お問合せ】　（一財）地域創造 芸術環境部　研修担当　TEL：03-5573-4066　E-mail：kensyu@jafra.or.jp
〒107-0052 東京都港区赤坂 2-9-11 オリックス赤坂 2 丁目ビル 9 階

■コーディネーターからのメッセージ・プロフィール

①ホール入門コース

コーディネーター：岩崎 正裕（劇作家・演出家／劇団太陽族代表）

1963 年三重県鈴鹿市生まれ。82 年大阪芸術大学舞台芸術学科在学中に「大阪太陽族」を旗揚げ。90 年に劇団名を 199Q 太陽族に改名。2001 年から現在の劇団太陽族で活動を継続。94 年に「レ・ボリューション」で第 1 回 OMS 戯曲賞佳作を、97 年に「ここからは遠い国」で第 4 回 OMS 戯曲賞大賞を受賞。他に大阪市咲くやこの花賞、兵庫県芸術奨励賞等を受賞。地域と連携した市民参加演劇やワークショップ等を多数手掛ける。大阪芸術大学短期大学部メディア・芸術学科教授。

どの職場も人員的に、或いは予算の面でもきっとギリギリですよね。突然の方針転換に右往左往する日々。お察し申し上げます。私は制作者でなくアーティストなので、様々な地域でたくさんの文化事業担当者と出会ってきました。その体験から、心が通じ合う担当者には共通点があることに気づきました。それは、その人自身に「本当の感動体験がある」こと。もちろん音楽、演劇、ダンス、美術等々、ジャンルは何でもいいのですが、今、自身が担当している事業の必要性が腑に落ちている人、と言い換えることもできます。しかし、そんな人たちだけが配置された職場なんて見たことありません。一人一人が「言葉」を獲得すれば交流が生まれます。そしてきっと摩擦も。けれども、それは市民社会に暮らす人々の真の豊かさに繋がるはずなのです。合理性のみが追求される困難な世の中ですが、ステージラボでの四日間は語り合う時間でもあります。上司に気兼ねする必要もありません。対話の中から、自身の指針となるものを探してください。

②自主事業コース

コーディネーター：松本 志帆子（藁工ミュージアム 学芸スタッフ／NPO 蛸蔵 理事）

大学で歴史を学んだ後、ボランティアを通じて現代アートに触れ、アートに携わる活動を行うようになる。2010 年学芸スタッフに着任。開館準備から運営に関わり、展覧会やワークショップ、演劇・音楽・ダンス公演、映画上映会などを企画・実施。障がいの有無に関わらず多様な方との創作活動に取り組むほか、障がいのある方の表現活動のサポートや人材育成なども行う。
様々な分野をつなぐネットワークをつくりながら、その時々のそれぞれの「適当」を大切に、様々な「枠」が広がり、誰もが個を尊重される社会を目指し活動している。

劇場や音楽堂が、文化芸術を鑑賞・創造する場にとどまらず、誰もが社会とつながり、参加できる機会をひらく社会包摂の拠点としての役割を求められる中、さまざまな人が参加できるよう工夫された取り組みが広がっています。一方で、「取り組まなければならない」「取り組みたい」と思いながらも、なかなか一歩を踏み出せずにいる方も多いのではないでしょうか。なぜ取り組む必要があるのでしょうか？始めるためのハードルは何でしょう？そして、その先にはどのような可能性があるのでしょうか？今回は、多様な方たち、特に障がいのある方たちが参加できるよう取り組んださまざまな事例を紹介するとともに、みなさんが抱える課題やハードルについて伺い、障がいのある方も交えて対話するプログラムを考えています。みなさんがこれからこうした事業に取り組むための一歩を、一緒に見つけていきましょう。

③公立ホール・劇場マネージャーコース

コーディネーター：松浦 茂之（公益財団法人三重県文化振興事業団参事、三重県文化会館副館長兼事業課長）

1968 年三重県四日市市生まれ。金融機関等の民間勤務を経て 2000 年より三重県文化振興事業団職員として勤務。総務部を経て 2007 年に事業課へ異動し 2019 年より現職。総務部では組織改革、業務改革に携わり、ISO9001 の導入、中期経営計画策定、指定管理者応募作業等を担当。事業課では事業統括と演劇事業を中心に担当し、複数のプロ劇団と公共ホールによる演劇制作「トリプル 3 演劇ワリカンネットワーク」、市民参加の疑似劇団活動「ミエ演劇ラボ」、注目劇団を紹介する「Mゲキセレクション」、まちなかリーディングフェス「ＭＰＡＤ」、「‘介護を楽しむ‘‘明るく老いる’アートプロジェクト」「なりかわり標本会議」等をプロデュースし、現在に至る。

2022 年大分セッション以来 2 度目となる同コースコーディネーターを務めます。コロナ禍を経てのわずか 4 年後ですが、この間も社会はめまぐるしく変化しています。東京一極集中による地方の人口減が加速し、少子化・超高齢社会も歯止めがかかりません。そして大国の思惑で紛争の絶えない世界、ＡＩの台頭などグローバルな環境も急変しています。このような先行き不透明な時代に、私たちの公立ホール・劇場はどうあるべきでしょうか？劇場の利用率や主催事業の入場率など、かつての定量的な成果指標が最適な劇場の評価になるのでしょうか？
実のところ私もその明快な答えは持ち合わせていないのですが、少なくとも時代に合わせて変化していきたい衝動と、考え続ける意欲は持ち合わせています。「これからの劇場が目指すべき道は何か？」同じような志を持つみなさんと楽しく一緒に考える研修になることを期待しています。